

プロローグ

ネオジオンとエウーゴの戦いが、ダブリンから宇宙へと移ってしばらく経った頃の話である。

戦線はネオジオン側が戦線が延びきった為の戦力不足と、エウーゴ、地球連邦軍の軍備建て直しの為に膠着状態に陥っており、各地で小競り合いが起きている他は、束の間の平和が訪れていた。

そんな中、ハマーンは信頼出来る部下を引き連れ、民間船に偽装した船でひっそりとサイド6の某コロニーを訪れていた。

表向きは観光客を装ってはいたが、本当の目的は連邦軍と深い繋がりがある要人と会い、援助をしてもらう事が出来ないか、または有利な条件の下で平和の道を探れないものかという事を話し合う為だった。しかし、事前にネオジオン側が得た情報によると、先日行ったダブリンへのコロニー落しが予想以上に世論の批判を集めており、連邦軍強硬派への格好な戦争継続材料になっているとの事だった。

もちろん連邦議会を事実上制圧している現在は、それが直ちに戦争再開へと結びつく訳ではないのだが、周辺の都市で連邦の特殊部隊がエウーゴ、カラバと共にダカール奪還作戦を展開しているという情報が未確認ながら入ってきていた。その為、現在のネオジオンが生き残る道は、ダカールを制圧している内に連邦政府と交渉に入る事なのだが、それは端から見てもかなり厳しい道に見えた。

*

*

会談前日

サイド6内にあるホテルの一室……その時間で昼を過ぎた頃であろうか……。ベッドの中で昨晩から睡眠を挟んでずっと肉欲を貪り合っている二人の姿があった。ハマーンと彼女の世話役として帯同を許されたナナイ・ミゲルだった。

二人はお互いがそれぞれの剃毛して毛がない局部を舐め合いながら、時には吸い付き、優しく噛み、なめ回し、指を大切な部分へ出し入れしたりと、延々とその行為を続けていた。

お互いうっすらと汗をかき、股間のもとより体中から淫靡な匂いを漂わせながら、いつ終わるともない行為を続ける二人……。若い二人の女性が裸体を絡め合う姿は、端から見ればとても艶めかしい光景に映っていただろう。

そんな行為がどの位続いたのだろうか……。ハマーンのクリトリスを甘く噛みながら優しく舐め回していたナナイの行為がピタリと止み、苦しそうな、しかしとても気持ち良さそうな表情をしながらこう言い放った。

「ハ……ハマーン様……もう……も……あっ！」

「ふふっ、まだ我慢出来るのではないか？ナナイ？」

「す……すみません……でも……ああっ」

体をよじらせて必死に堪えるナナイ。しかし、そんな抵抗もハマーンの舌技の前には無意味だった。

「あ……ああっ……！！！」

一瞬体がこわばった直後に弓なりの様な体勢になり、小刻みに震えながら絶頂を迎えるナナイ。数十

秒間の絶頂を迎えて痙攣した後、力が抜け動かなくなったのを見計らって、ハマーンはそつと股間から顔を上げ、幸せそうな表情をして目をつむっているナナイの上に乗る、その表情を無言で眺め続けた。ハマーンの視線に気付くナナイ。

「ハマーン様……」

ナナイがそう言い終わるか終わらない内に、ハマーンはナナイの唇を奪い、舌を絡め合いながら胸や腰、そして下半身を再びまさぐった。

「ああっ……好きです……とつても好きです……ハマーン様」

「私もお前の事がとつても好きよ」

「はい……」

ナナイの火照った顔が一瞬嬉しそうな表情に変わった瞬間、ハマーンにしがみ付いたかと思うと彼女は再び快樂の絶頂を迎えた。

「あ……また……イきます……イッてしまいます！ああっ！！」

快樂の頂点を迎えて痙攣した体が、徐々に弛緩していく様子を、ハマーンは幸せな表情で眺めていた。そんなハマーンに対して、ナナイはこう言った。

「ハマーン様……また私ばかりイッてしまいました。……ハマーン様を喜ばせる事が出来なくて……すみません」

その言葉に、ハマーンは優しい口調で答えた。

「気にする事はない。私の場合、もう普通の刺激では感じなくなっているから……」

「え……」

ナナイの驚く表情を見ながら、ハマーンは後ろめたそうにこう言った。

「最近はもう…体を縛って強い刺激を受けたり、外で誰かに見られるかも知れないという刺激が無いと感じない体になってしまったよ。こんな性癖の私は……お前から見たら『変態』という部類に入るのだろうか……」

「……」

「お前の憧れの人のイメージを壊してしまったかな？」

「そ……そんな事はありません。例えどんな事をしていようとも、私のハマーン様に対する憧れは変わりません。いえ、変わる筈がありません！」

「ふふっ、そう言ってくれると嬉しい……」

ハマーンはナナイをそっと抱き締め、再び激しく唇を重ねた。絶え間なく続く激しい行為に、ナナイは嬉しいと思う反面、体力的に限界を迎えつつあったのもまた事実だった。

「ハマーン様……ハマーン様と愛し合えるのはとても嬉しいのですが……」

「ん？どうした？」

「ハマーン様はお疲れにならないのですか？私はもう……」

「ふふ……昨日からずっと喘ぎっぱなしだからな……」

「すみません」

「あやまる事ではない。むしろあやまるのは私の方だよ。お前にこんな事までさせてしまって……」

その言葉に、ナナイは少し怒ったような口調で言い放った。

「ハマーン様があやまる事なんてありません！確かに誘われはしましたが、望んだのは私の意思です。ですから、もっと堂々とした態度でいて下さいませ」

「……………」

「私ではハマーン様の心の傷を直す事は出来ませんが、少しだけでも癒す事は出来ます。私はハマーン様のお役に立つ事が出来れば、それで本望なんです！それだけです！」

「……助かる」

シヤアが去ってからというもの、ハマーンを支えるのは『ザビ家を再興する』という信念しかなかった。ただし、シヤアにミネバを預け、影武者を立てて傀儡にして行動しているという事は、彼女が自分だけ……現在のネオ・ジオンの戦力だけで目的が達成出来るとは思ってはいないからである。仮に一時的にそれを達成する事が出来たととしても、民衆の支持が全く無い状態では長続きしない事は、彼女自身充分過ぎる程判っていた。ネオ・ジオン内だけならばハマーンの支持は絶大なのであるが、地球圏全体では、やはりシヤアやミネバ（正確にはザビ家）の知名度には叶わなかった。

また、実戦経験が乏しい素人軍人が大半を占めるネオ・ジオンにおいて、彼女一人の背中にかかる重圧は並大抵のものではなかった。現時点でのネオ・ジオンの戦力は確かに優位であるが、持久戦になれば地球連邦（エウーゴ、カラバを含む）との国力の絶対差は明らかかな訳であり、そんな状況で彼女に出来る事は、負ける瞬間を少しでも先に延ばす事位だけなのである。

なぜ彼女がそこまでして前に進まなければならぬかと言う理由はただ一つ……自分から去ったシヤ

アが再び表舞台に立つだろうその日の為に、少しでも彼の前に道を造り、残しておきたい……シヤアの障害となるモノは今の内に出来るだけ取り除いておきたい……それだけなのだ。

そうしていると、ナナイが不思議そうな顔をしてハマーンに問いかけた。

「ハマーン様……」

「ん？どうした？」

「ハマーン様は今回の会談に、何故私を同行させたのですか？」

「嫌だったのか？」

「いいえ、むしろとっても感謝してます……でも、私よりも優秀な女性兵士は沢山いる筈ですし……その……」

「成る程……理由を聞きたいというのか？」

「はい……是非」

ハマーンは一瞬やれやれという表情をしたかと思うと、ナナイの目を見ながら話し始めた。

「一つ聞くんが、お前はシヤアの事をどう思っている？」

「シヤア・アズナブル様の事ですか？」

「そうだ」

「それは……その……」

頬を赤らめながら返答に困るナナイ。

「どうした？私に気兼ねせず思っている事を答えてほしい」

「はい……ハマーン様と同じ位とっても憧れの存在です……すみません」

「謝る事ではない。むしろ私もお前がシャアの事をそう思ってくれて、とても嬉しく思う」

ハマーンはそう言いながら、やさしくナナイの髪を撫でた。

「え？ハマーン様はシャア様を……その……恨んではいらつしやらないのですか？」

「私が？シャアを？……か？」

「はい……だってシャア様はハマーン様を見捨てて逃げたお方ですもの……」

「ふふっ……。確かに恨んでいないと言えば嘘になるが……それと同じ位好き……いや愛していたりもするよ」

人には滅多に心を開かないハマーンが、珍しくナナイに本音を語り始めた。更に話を続けるハマーン。

「私とシャアが深い関係だったのは……知ってるな？」

「は……はい……」

顔を赤くしながら頷くナナイ。

「私とシャアは『ジオンの再興』という同じ夢を持って行動していると思っていた。いや、一時はシャアもその事には同調していた筈……でも……」

一瞬話を止めた後、再び話し始めるハマーン。

「私とシャアは体の相性はとても良かった。それはシャアも認めているよ。……でも心の相性だけは徐々にずれていって……結局合わせることは最後まで出来なかった……」

「でも、ハマーン様とシャア様はとっても上手くいっていた様に見えましたが……？」

「表面上ではな……。でも、お前達が見てない所で言い争いも多かったんだよ」

「え……。そんな……!!」

「シャアも心の余裕が無かったし、私も父が死んで気負っていた面もあったかもしれない。でも、冷静に考える余裕なんてお互い無かったよ……。互いに認め合い、必要としている存在なのに、なぜこうも激しく衝突してしまうんだろうって……。当時はずいぶん悩んだものだ」

「……」

「それに、私達は心の乖離が大きくなっていくにつれて、お互いの心の渴きを埋める為に……。徐々にアブノーマルな快楽に溺れていったよ。アクシズではそれ位しか楽しみが無かったし、それが離れていくお互いの心を繋ぐ唯一の術だと思ったから……。でも心が離れていくのは止められなかったし、それに比例して行為は際限無くエスカレートしていった。愛のない刺激はすぐに慣れてしまうからな……」

ハマーンはそう言うと、シャアと共に行っていた数々の赤裸々な行為をナナイに話して聞かせた。それは器具を使った様々なプレーや、アナルセックス、浣腸といったSMプレーはもとより、アクシズ内での露出プレー、そして着衣の下に縄や器具等を身に付ける羞恥プレーなど様々だった。その内容の凄さにナナイは驚き、恥ずかしさの余り言葉を失った。

自分の憧れであるハマーンが、影でこんなに淫乱な行為に耽っていた……。凛々しく指揮を執る服の下には常に何かしらの責め具を身に付けていた……。

ハマーンはその表情を見て、視線を逸らしながらこう呟いた。

「軽蔑……。してくれて構わんよ……」

哀しそうな表情をしてうつむくハマーンを、ナナイはそっと抱き締めてこう言った。

「いいえ。例えどんなに汚れてようとも、私はハマーン様を一生お慕い申し上げます」

余りにも辛く、激しい彼女の生き方に対して、ナナイは無意識に涙を流していた。

「私の為に泣いてくれるのか？」

「え？あ……私……泣いてますね……どうしたんだろう……涙が止まらない……」

「ありがとう。ナナイ。でも……あのまま私とシヤアと一緒にいたら……行き着くところは『死』だったよ。それは究極の快樂だからな……」

「お互いがお互いを認めているのに……」

「ああ……私も、やり直せるかもしれないと思つて何度かシヤアに言ったのだが……」

ハマーンはアクシズが地球圏に戻って来てから、幾度と無くシヤアに遠回しではあるが戻って来てくれとアプローチを試みていた。

「そう言えば、シヤア様を救助された時、なぜ無理矢理にでも引き留めなかったんですか？」

それはグリプス戦後に、負傷したシヤアを一時保護していた時の事を言っていた。（注…筆者の「背徳の恋華」参照）その言葉にハマーンは一瞬躊躇った後、こう応えた。

「それは……当然思つたし期待もしたし、話し合ひもしたよ……。でもあの時何度か体を重ねて……心を通わせ合つた時、彼とはもう一緒に歩む事は不可能だとも悟つたよ。アクシズがネオ・ジオンと名乗つて地球圏で一定の力を得るにはシヤアというカリスマが絶対に必要なのだ。それに彼が戻らないという時点で本当は手を引くのが正しい選択だともな。でも一旦動き出したものを止める事は出来ない……」

「……………」

無言で話を聞いているナナイの頭をそっと撫でながらハマーンはこう話を続けた。

「だからもう私は……シヤアが立ち上がり行動を起こした時に、出来るだけ障害が少なくなるように道を作っておければ……それで充分だよ」

「ハマーン様……」

ナナイの悲しそうな表情を見て、ハマーンは優しい口調でこう言った。

「……お前を徴用したのは、私の代わりにある任務を任せたいからなのだが……それはいずれ話す。だから……今は快樂に身を預けて欲しい……私の為に……」

「はい……」

唇を重ね合う二人は、再び倒錯した行為に戻っていった。まるで世の中の事を全て忘れてしまいたいかのように……。

*

*

自慰

数時間が過ぎた頃、二人の行為はやつと終わりを告げた。その後七回程絶頂を迎えて幸せな表情をして寝息を立てているナナイとは対照的に、ハマーンは一度も絶頂感まで達する事が出来ず、心の中に疼く欲望を抑えきれずにいた。

シヤアとの愛する行為……それに付属する筈の快樂が、いつの間にか快樂を追求する為だけの行為に

すり替わってしまったのは、二人が若かったという事と、置かれている立場ゆえの重圧から逃れたかったからという事で、仕方なかったのかもしれない。

しかし、快樂のみを追求する行為は、徐々に体が刺激に慣れてくると更にエスカレートしていくという悪循環を生んでしまった。

この状態から逃れる為には、精神的なケアが必要なのだが、現状ではそれから逃れる余裕など無いに等しかった。

満たされないハマーンの心は、欲求不満となって疼きまくり、更なる快樂を求めたくてたまらない状態になっていた。しかしナナイはもう動けなくなっており、これ以上の負担をかけるのは無理だと判断した彼女は、ベッドから起き上がり、部屋にある等身大の鏡の前に立った。

そこには、体中から淫靡な雰囲気を漂わせている一匹の牝が映った。

「私は……自分のオナニー姿を見て欲情する変態です……。シャア……。いいえ、私のご主人様……。どうか私の嫌らしい姿をご覧下さい……。ああ……。恥ずかしい……。とっても恥ずかしい……。です」

ハマーンは、シャアの前でオナニーを強制させられているというシーンを想像しながら、綺麗に剃った下半身に両手の指を這わせた。左手で閉じた部分を広げながら、右手で最初は優しくクリトリスを撫でた。しばらくそのままの状態で深いため息を付きながらオナニーをしていたのだが、やがて立っているのがもどかしくなったのか、その場に両膝を立てて股間を少し開き気味の体勢になった。

彼女の指先は一層激しさを増していった。

鏡を見ると嫌らしい姿の自分が、一心不乱にオナニーしている姿が映る……。普段の規律正しいハマ

ーンの姿からは想像も出来ない淫乱ぶりだが、それが彼女をより一層興奮させていた。右手はヴァギナから溢れる液を指ですくい、クリトリスの皮を剥いて人差し指と中指の間に挟むような感じで擦りあげ、左手はヴァギナの中に三本の指を入れてこねくり回した。

「あ……ん……んっ……あっ！！ああんっ！」

激しい声を上げながら、体を上下に揺するハマーン。

「ああっ……シヤア！私はこんなに変態なの！見て！変態の私を見て！貴方の為に何でもするから……私を……ああっ！」

頬を赤く火照らせ、体からはうつつすらと汗が吹き出していた。部屋中に彼女がいじっている股間の音が響き渡った。

「ああっ……気持ち……いい……」

ヴァギナの液で少しふやけた左手の指を、今度はアヌスに入れ、右手を親指を残してヴァギナに入れてこねくり回した。残った親指はクリトリスを触るというよりも激しく押し付ける感じで擦った。普通なら痛くて感じるどころでは無いのだろうが、ピアス貫通やバイブの刺激はもちろんの事、電気刺激すら何度も経験しているハマーンのクリトリスは、もう簡単な刺激だけでは余り感じなくなっていた。

『もつと……もつと激しく……もつと……！！ああ……恥ずかしい……私は変態……そう淫乱な変態なの！！』

体を弓なりに反らせ、動きが一段と激しくなったかと思うと、やっと彼女にも絶頂の時が訪れた。

「あっ！イ……イクッ！！」

弓なりの体型のまま体を小刻みに痙攣させたハマーンは、力が抜けると床に倒れ込むように崩れ落ちた。涙目になりながら肩で息をするハマーンだったが、右手はまだ下半身をゆっくりとまさぐっており、快楽の余韻に浸っていた。

いつの間にかアヌスから抜けていた左手を口元に持ってきてそっと舐めた。独特のすえた味が彼女の口の中へ広がった。

『苦い……』

排泄物を味わうと言うよりも、その行為自体に酔っているという感じだった。しばらくそうやって時を過ごしていたハマーンだったが、快楽の波は収まるどころか更に淫乱な渦となって再び彼女の中で蠢きまくった。これは精神的に壊れたような状態で、快楽だけを追求しているのだから無理はない事であるが……。

『ダメだ……足りない……』

心の中でドロツとした淫乱な気持ちが次第に大きくなってくる。しばらくの間は込み上げてくる淫乱な気持ちと必死に格闘していたのだが、やがてふらっと立ち上がり汚れた手を洗うとクローゼットのあつ方へと向かった。そして扉を開けて隅の方に置いてあるジュラルミン製のアタッシュケースを取り出した。彼女はそれをテーブルの上に置いてそっと開けた。その中には縄はもちろんの事、各種大小のバイブから拘束具、浣腸器具等、SMプレイで必要とされる道具が沢山入っていた。

彼女はその中から前後の穴に入れるバイブとビニール製のロープを取り出した。ロープを手にして躊躇していたハマーンだったが、やがて意を決したようにそれで自分の体を縛っていった。

「くっ！……こんな事……やめないと……」

何度も躊躇っては手を止める彼女だったが、快楽に溺れきっている自分の心には勝てなかった。絶頂に達して弛緩している体に、容赦なく縄を食い込ませるハマーン。その作業の合間に、前と後ろの穴にそれぞれローションを塗ったバイブを埋め込んだ。

自分の体を縛り終わると、乳首とラビアにピアスを装着し、ショーツにはナプキンを付けて服に愛液がしみ付かないようにした。そして外出用の服を着て、薄く化粧をした。(注…ブラはピアス装着の為していない)

そうしていると、ベッドで寝ていたナナイが目を覚ました。

「あ……ハマーン様……お出かけなのでですか？」

「ああ、起きたか。これから、お前が調べてくれた場所へ行ってみようと思う」

「私が調べた場所って……あそこの事ですか？」

「そうだ」

ナナイは慌てて起きあがろうとしたが、腰に力が入らず動けなかった。

「あんな所へハマーン様お一人で行かれるなんて……危険です！危険過ぎます！」

「だが、殆ど人が来ない場所なんだろう？お前もまだ動けそうもないしな……大丈夫だよ」

そう言って、S M道具が入ったアタッシュケースをたたんで持ち歩こうとした時、ハマーンの体から『ギユギユ……』という縄がきしむ音が聞こえた。それに敏感に反応するナナイ。

「ハマーン様……まさか服の下……」

その言葉に、目線を逸らして頬を赤く染めたハマーンは、何も答えなかった。

「……」

「おやめ下さい！……誰かに見付かったらどうなさるおつもりですか！？ハマーン様が満足出来ないというのでしたら、私がSでもMでもお相手致しますので、露出行為だけは絶対におやめ下さいませ！」

ナナイの言葉に、哀しそうな表情で答えるハマーン。

「ナナイ……私はもう……誰かに見られるかもしれない……気付かれるかもしれないという行為がたまらなく気持ちいいんだ……。この満たされない思いを埋める為にも……公園で……」

「でも、もし見付かりでもしたら……指導者としての威厳を全て失う所か、ネオ・ジオン全体の権威が失墜する事にもなるかもしれませんよ！それにその事をグレミーが反乱の口実にするかもしれませんし、私は絶対に反対です！」

「その時は……私に運がなかったという事だよ……ナナイ」

「そんな……ハマーン様らしくもない事を……。それなら私が見張りとしてご一緒致します！」

ナナイの心から心配する気持ちたちがハマーンには痛い程判った。

「お前はまだ動けないだろう？私とてそれ程愚かな人間ではない。人の気配を察したら素早く逃げるよ」

「でも……」

「心配性だな……。では出来るだけ連絡を入れる事にするよ。もし今日中に私が戻るか連絡が無かった場合は公園まで来てくれ。それ位までなら……お前も歩けるようにはなるだろう？」

「は……はい。判りました。ハマーン様がそこまでお言いになるのでしたら……」

「では行ってくるよ」

「はい。お気をつけて……ハマーン様」

ハマーンは部屋の外へ出て、電気自動車が置いてあるホテルの地下に移動した。その途中も縄がきしむ音が常に鳴っていたのだったが、幸か不幸か誰ともすれ違う事は無かった。

『ふう……さて……』

少し安堵の表情を浮かべながら、ハマーンは股間をそつと触ってみた。既にうっすらと濡れているのが判った。

『……私は……本当に淫乱で変態だな……』

彼女は電気自動車を操縦してホテルを後にした。

*

*

野外露出

しばらくした頃、郊外にある森林公園にハマーンの姿があった。ここは事前偵察の為にナナイをサイド6に送り出した際、ハマーンが任務とは別に露出スポットを探すように指示して見付けた場所だった。

この公園は、車などの移動手段が無いと来られない様な場所である上に、広い敷地をぐるっと回る遊歩道があるのだが、出入り口が一カ所しか無い作りになっていた。その上、万が一人が来た場合は必ず駐車場に車が入ってくるので公園内でききなり人と会う危険性が少ない事と、戦乱の影響なのか手入れを怠っているらしく、雑草や大小の樹木が伸び放題になっており、万が一の時に容易にそれらの影に隠れる事が可能だった。

また、駐車場にはトイレが併設されており、おあつらえ向き？に身障者用トイレも完備されていた。更にトイレの出入り口は駐車場側からは見えないようになっており、そこで裸になったまま容易に公園内へと進入する事が出来た。

『今ならまだ引き返せる……もし誰かに見付かったら……終わりのよ……』

そんな言葉を心の中で呟くのだったが、いつももう一つの淫乱な心がこうささやくのだった。

『でも、貴方は見付かって全ての穴を犯されたいのよね。今の自分を全部壊したいんでしょ？今の立場から降りたいんだよね？監禁されて現実の苦しい事を全て忘れる位快樂漬けにされたいのよね？そうでしょ？ハマーン……？』

そんな心の囁きに自問自答するハマーン。

「違う……私はそんな事は思っていない！私は今の地位に満足している！私はネオ・ジオンの指導者なん

だぞ！そんな弱い心なんて持ち合わせてはおらん！」

『私は貴方……貴方の心は誰よりも良く判ってるわ……。でも、本当は寂しいのよね……。シャアに捨てられた事がとっても辛いのよね……。』

「そんな事はない！私は寂しくなんかない！それにシャアとはもう済んだ事だ！」

『それはどうかしら？宇宙空間でシャアを拾って……。しばらくの間シャアと一緒にいた貴方はとても幸せそうだったわよ。でも今の貴方はまるで抜け殻のよう……。だからこそ快樂で辛さを紛らわせたいんですよ？』

「違う！」

『ふふふつ。自分の姿をよく見てみなさいよ。貴方は全身を縄掛けしてバイブを下半身に入れて、乳首とラビアにピアスをするような淫乱で変態な女なのよ。……。それも自分自身で……。』

「そ……それは……」

『自分に素直になりなさい……。ハマーン。貴方は一匹のマゾ女なのよ……。素直に快樂の中に身を置きなさい。今はそれだけが、この苦しみから逃れる為の唯一の方法なのだから……。』

その（心の中の）言葉とやり取りをしている内に、ハマーンは心の奥底で淫乱な塊が満ち溢れてしまい、遂に耐え切れなくなった。それでもしばらくは必死に耐えていたのだが、やがて顔を真っ赤にしなから息を荒くして、小さな声でこう言い放った。

「……はい……その……通りです……」

ハマーンはそう呟くと、もう自分の欲望を止める事は出来なかった。回りに人がいない事を確かめた

上で、ケースを右手に持ちながら、身障者用のトイレに入って行った。

「はぁ……はぁ……はぁ……んっ！」

身障者用のトイレに入り、扉を閉めて鍵をかけ、鼓動の高まりを落ち付けようとするハマーン。中はそれなりに清潔にされていたが、トイレには独特の匂いがあり、彼女に以前シヤアによってアクシズ内の男性トイレで散々調教された過去を思い出させた。

「もう……ダメ……我慢出来ない……!!！」

そう言いながら服とスカート、ストッキングを脱ぎ、洋式便器の便座の上に置くハマーン。手洗い場の鏡に縄掛けされた自分の姿が映る。

『私って……変態……ね……』

そう心の中で呟きながら、ピアスが付いている乳首を軽く撫でた。

「あっ……気持ち……いい！」

公衆の場所で非日常的な行動をしているという背徳感の為か、とても敏感になっていた。

『さぁ……ハマーン……その最後の下着も脱ぎなさい……』

彼女の中にある淫乱な心が再び語りかけてきた。

「いや……そんな事……出来ません！」

『どうして？ 貴方はシヤアと一緒に散々こんな事をやってたじゃないの。今更恥ずかしがる女じゃ無いでしょ？……さぁ……』

「でも……はぁ……嫌っ……ダメ……降ろしちやダメッ！」

ためらう素振りをしながらも、徐々にショーツを降ろしていくハマーン。こんなシチュエーションが彼女の淫乱な心を更に増幅していった。

「あ……」

ショーツに貼り付けていたナプキンに、彼女股間から溢れた愛液がべっとりとなり付着していた。それを指ですくってそっと舐めるハマーン。目がトロロンとしており、体からは淫乱な匂いをプンプンと漂わせていた。

「こんな事……誰かに見られたら……」

そんな言葉とは裏腹に、下半身に埋め込んでいる二つのリモコンバイブ（遠隔操作型）を作動させた。

「はうっつ！！……い……い……い……い……！！」

強烈な快感が彼女の体を突き抜けた。余りの気持ち良さの為、立っている事が出来ずに壁にもたれ掛かった。そして、右手は前に埋め込んだバイブを押さえ、左手は左の乳首に付いているピアスを無意識に引っ張った。

「あああつ……！！あつ……あつ……気持ちいいっ！！」

膝がカクンと折れ、トイレの床にうつ伏せになり、ひたすら快楽を求めるハマーン。普段人を指導する立場にいる自分が、こんなみじめな姿でひたすら快楽に溺れている……このギャップが彼女にはたまらなく気持ち良かったのである。

「い……イクツ！……イツちやう！あつ……あああつ！！」

体を激しく揺らしながら絶頂を迎えるハマーン。全身を痙攣させながら数十秒程絶頂に経っていた後、

硬直した体が徐々に弛緩していった。そして、へばりつくような姿で床に伏せた。目は焦点が定まらずうつすらと涙を流しており、口はだらしなく開けてよだれを垂らしていた。快樂で頭の中が真っ白になっていたが、その余韻を彼女は心地よく思うのだった。

どの位経った頃だろうか。ハマーンはおもむろに起きあがると、アタッシュケースの中からガラス製の浣腸器とグリセリンが入った容器、そして赤い首輪と手錠、それに白のニーソックスを取り出した。

『さあ……これからが本番よ……判ってるわよね……』

再び心の中にいるもう一つの自分が語りかけてきたが、もう抵抗する理性など残っていないかった。

「はい……」

素直にそう呟くと、まず首輪を身に付けて、その後浣腸器にグリセリン溶液を入れ洗面台に片足を上げた。アヌスにはバイブが埋め込まれているのだが、浣腸液が注入可能な構造になっており、逆止弁付きという便利な代物だった。注入口を探して浣腸器の先端を合わせ、ゆっくりと注入していくハマーン。その光景は目の前の鏡に映っており、淫乱な自分の姿を見て更に興奮していった。

「ああ……」

二百cc用の浣腸器が空になり、更にもう二回注入するハマーン。浣腸の為に下腹部が徐々に膨らんでくるのが判った。

「はあ……すごい……入っちゃった……全部……入っちゃったのね……ここに……」

お腹を軽くさするハマーン。そして浣腸器の先端を軽く水で洗い、アタッシュケースの中にグリセリン入り容器と共に戻した。次に前後の穴に埋め込まれているバイブのスイッチを『ランダム』に設定し

て、手錠の鍵と共に洋服のポケットに入れた。そしてそれらはトイレの隅にある掃除用具置き場の所へ隠した。

「これで、手錠をすれば完成だわ……。あ……。忘れてた」

ハマーンはアタッシュケースを再び開けて、中から事前に用意してあった『故障中』と書かれたプレートを取り出した。これを入り口に引っかけておけば余程の事がない限り、中に入って来ないだろうという考えだった。そうしている内に、徐々に浣腸が効き始めてきた。

『痛っ……。早く……。早くしないと……』

ハマーンは慌ててニーソックスを履き、そっと扉の鍵を外して外を覗き、誰もいないのを確認してノブの部分にプレートを貼り付けた。そして一旦中へ戻り、手を後ろに回した状態で手錠をかけた。

『さあ……。外に出るのよハマーン……。お散歩したいんですよ？』

心の中の淫乱な気持ちのままに、ハマーンは不自然な格好で扉を開けて再び外を見渡した後、意を決して外へと出た。彼女の火照った体を外の風がそっと撫でていった。森林公園のトイレ脇に佇む全裸で縄掛けされた女性の姿……。

「ああ……。く……。苦しい」

浣腸の苦しさが徐々に大きくなってきた。腹を押さえて痛みを和らげようにも、後ろ手で手錠をしているので、それすら出来ない状態なのだ。

「公園内を一週すれば……。この苦しみから逃れられる……。行かなきゃ……」

そう呟きながら、自分で決めたルールに従ってヨロヨロとした足取りでハマーンは遊歩道を歩き始め

るのだった。

* 出会い *

「まったく……僕はいつもついてないなあ……」

ハマーンが森林公園を歩き始めた頃、その近くの道路を一人で歩いている男の姿があった。一年戦争で連邦軍の英雄と称されたアムロ・レイだった。

彼はネオ・ジオンがダカールを制圧してダブリンを攻略していた頃、ベルトーチカと共に宇宙に出て、その後カラバとエウーゴの橋渡しの役目を行っていた。

そんな中、戦闘が小康状態になった事もあり短い休暇が取れた訳だが、それを利用して単身父親がいるサイド6を訪れたのだった。しかしそこで父親が既に亡くなっている事を役所で知り、埋葬されている共同墓地（コロニー内に数カ所あるのだが、そこには僅かの灰しか埋葬出来ない）に行き、数年振りの再会？をしたのだった。

その後、帰り道にレンタルの電気自動車が故障して動かなくなり、業者と連絡が取れたものの人手不足で回収の予定が立たないのでそのままそこに放置しておいてくれという事だった。その車には認識システムが装備されているので他人に盗まれる心配は無いのだが、代車の目処すら立たないという話なのでホテルまで歩いて帰らなければならなかった。以前、サイド6を訪れてトラブルに遭遇した際は、偶然にもシヤアとララアに出会って助けてもらった訳であるが、今回はそんな感じの出会いは無いまま

*

*

延々と歩き続けていたのである。

「これから歩いて帰っても一時間以上か……まったく、ホント面倒だなあ……」

普段のアムロなら大した距離では無いのであるが、父の死という現実を突き付けられた後である為、一刻も早く心を休めてて精神を回復させたかったのである。本当なら今すぐにもベルトーチカを抱きたい位なのであるが、今回は単独での休暇の為、残念ながらもすぐには会う事が出来なかった。それならば街にあるパブで夜通し飲み明かして過ごそうかと考えながら歩いていた……そんな時、アムロは幹線道路から少し離れた森林公園の駐車場に、一台の電気自動車が止まっているのを見付けた。

「遊びに来てる人がいるのか……」

アムロはそう言いながら、森林公園の駐車場へと向かった。

車の側まで来て辺りを見回したが、人の気配は全く無かった。それならトイレに入ってるのかも知れないと外から呼んでみたのだが、当然ながら反応は無かった。

「全く反応が無い……か。僕みたいに故障して放置してあるのかもしれないなあ……」

そう思ったアムロは再び歩き始めようとしたのだが、車の持ち主は公園内を散歩しているのかもしれないと思い、入り口側にあるベンチに腰掛けて人が出てくるのをしばらく待つてみる事にした。

「さて……どんな人が散歩してるのかな……？」

そう呟きながら、背広の内ポケットから缶コーヒーを取りだして飲み始めた。すると、日頃の疲れからか、ついウトウトと居眠りをし始めた。もしこれが戦場ならばかなり危険な事なのであるが、中立権を確立しているサイド6では、連邦系、ジオン系共に小さな争い事であってもタブーとする空気があり、

治安もかなり良かったのである。また、双方の出身であっても、ここでは皆紳士的に振る舞うのが慣例となっており、立場が違うだけで、皆本当は戦争などはしたく無いというのが本音だった。それ故にアムロも単独で行動することが出来たのである。

アムロが入り口のベンチでくつろいでいた頃、ハマーンは誰もいない公園内の遊歩道を浣腸による苦痛で何度も立ち止まりながら、少しずつ出入り口の方へと向かっていた。

『もう……ダメ……助けて……苦しい……ああっ!!』

腹の痛さに耐えきれずに、何度もその場にうずくまるハマーン。時々肛門括約筋が麻痺して中から排泄物が飛び出そうとするのだが、縄でバイブを押さえて抜けないようにしていた為、彼女は排泄感の波が収まるまで必死に耐えるしか無い状態だった。もちろん途中何度も我慢出来ずに縄を外して排泄しようと思ったのだが、後ろ手に手錠をした状態である上に、縄を簡単に外せないように下半身の数カ所を固結びをしていたのだ。

『ああ……もう出させて下さい……我慢出来ない……』

体は、道中でうずくまったり転んだりした時に付いた泥や傷があちこちに付いていた。自分の余りにも惨めな姿に思わず涙が出てしまうハマーンだったが、それも強烈な排泄感に何度も襲われる事で、その事に気付く余裕すら無かった。

「あっ！出る……出る！！ぐがっ……！！」

ハマーン膝立ちの姿で空を見上げながら、排泄の波が収まるのを必死に耐えた。体中から脂汗を流し、

体を小刻みに痙攣させながらしばらくそのままの体勢でいたのだが、波が収まるとゆっくりと立ち上がり、再び出口へと向かって歩き始めた。

『なんで私……こんな事してしまったんだろう……。どうして私……こんな事が好きな女になってしまったんだろう……。もし誰かにこんな姿を見られたら……。私はもう……。』

毎回、自分の行為に激しく後悔するハマーンだったが、プレイ後にもう二度とやるまいと心に誓っていても、後日その快樂が忘れられず、再び行ってしまう事を彼女はもう何度も経験してきた。そして、これは誰かに見付かって社会的地位と名誉が破滅するまで延々に続いてしまう事なんだと彼女は感じていた。

『もう……こんな事やめたいけど……。やめられない……。やめられないの……。ううっ……。！』

もうろうとした意識の中で考えている事は、激しい自責の念と、トイレに戻って排泄したいという事だけだった。排泄さえすれば、そんな全ての事から開放されて至福の安堵感が待っているからだだった。

「あと……。少し……」

不安定な足取りでやっと公園の出入り口付近まで来た時、ハマーンは我が目を疑った。出入り口側にある椅子に人（アムロ）がいたからだ。

「そ……。そんな……。人がいるなんて……！」

トイレに入るにはそこを必ず通らなければならない訳であり、相手に気付かれずに通り抜ける事は、まず不可能だった。

「とりあえず……。人が帰るのを待たないと……。もし見付かりでもしたら……。私は……」

幸いな事に、相手（アムロ）の方はうたた寝をしていた為、ハマーンには気付いていなかった。彼女は排泄感を必死に耐えながら遊歩道を少し後戻りして、草むらが多く繁っている所に隠れて彼が立ち去るのを待とうと考えた。

しかし、その時ハマーンは致命的なミスを犯してしまった。歩いている最中に、うっかり枯れた木の枝を思いつ切り踏んでしまったのだ。

バキッ！

慌てて近くの草むらに身を潜めようとしたのだが、その時も足がもつれて思いつ切り草をかき分ける音を発して転んでしまったのだった。

「あっ！」

ガサガサガサ！

草むらに転がった彼女の顔は、見付かるかも知れないと言う恐怖で引きつっていた。

『お願い……気付かずに帰って……お願い！！ああっ……』

心の中で必死に懇願しながら、ハマーンは息を殺してその場をやり過ごそうとした。体がガタガタ震え、横になったままではあるが、膝を抱える様な体勢になって……それは端から見たら強姦された後と勘違いしそうな姿だった。

*

*

発覚！

ベンチでうたた寝をしていたアムロだったが、ハマーンが枝を踏んだ音とその直後に聞こえた草をかき分ける音に敏感に反応した。命の危険が常に付きまとう戦場で戦う者としては極当然の事だった。

「何だ？……今のは……」

とつさにベンチの影に隠れるアムロ。しばらく様子を見てみたのだが、殺気らしいモノは感じられな
いと判ると、恐る恐る物音がした方向に向かって歩き始めた。

『誰かが僕を狙っているのか？いや、それならわざわざこの場所で待ち伏せする事など無い筈だ。僕がここに寄るという可能性は低かったのだから……』

注意深く辺りを見回しながら、アムロはゆっくりと歩を進めた。

「すいませーん。誰かいるのですかあ〜！？」

声をかけては見るものの、返事は帰ってこなかった。

「ふくん……動物か何かだったのかな……？」

彼は音がしたと思われる場所にしばらく佇んで辺りを見回してみたのだが、人の気配は一切感じられ
なかった。アムロはニュータイプとして人の心を敏感に察する能力があるにも関わらずである。

「仕方ない……諦めて歩くかあ……」

アムロはそう言いながら、公園の出入り口へ歩き出した。

彼が出入り口へと歩き出したのを、ハマーンはすぐ近くの草むらの影から息を殺して見つめていた。

可能な限り気配を消してひたすら排泄の苦しみに耐えていた彼女だったが、一瞬安堵の表情を浮かべた

その時、今まで以上の激しい排泄感が襲いかかった。更にに間が悪い事に、下半身に埋め込んでいる二つのバイブ機能がどちらもランダム機能の『強』に切り替わってしまった。予想外な刺激の集中に、それまで必死に我慢していたハマーンの口から、悲鳴にも似たあえぎ声が漏れてしまった。

「あ……！！あがががつ！！……く……く……苦るし……ぐふっ！！」

思わずその場で草をかき分けてのたうち回ってしまうハマーン。ハッと我に返った時は既に遅く、その音をアムロにしっかりと聞かれてしまったのだ。

「なんだ！今の声は！？」

アムロは帰る足を止め、声が出た方向へ引き返した。感じた気配が一人であつた事から、アムロはカップルが性行為に及んで出した声とは違うと確信していた。彼は恐る恐る遊歩道から草むらの中に入り、声が出た方向の草をかき分けてゆっくりと辺りを覗いてみた。

すると……そこには後ろ手に手錠をして全身に縄掛けした女性（ハマーン）が、恐怖で引きつった顔をしながらこちらを向いて横たわっていたのである。

余りのショッキングな光景に、アムロは一瞬我を忘れて固まってしまった。しかし驚いていたのはアムロだけではなかった。ハマーンは自分の赤裸々な性癖を見ず知らずの男性に見られてしまったのだ。恐れていた事が遂に訪れてしまったショックでパニック状態となってしまうハマーン。

「あ……・ああ……あ……あつ……ひっ……！」

言葉にならない声を発して、ハマーンは首を横に何度も振りながらその場から逃げようとした。しかし、後ろ手で手錠をしていたのと、パニックと恐怖で膝が震えて立てなかった為、上半身だけ起こした

格好で後ずざりをする事しか出来なかった。

その光景を呆然と見つめていたアムロだったが、ハッと我に返ると、まず回りを見渡して人……彼女をこのようにした人間（つまり強姦した人間）がいないかを確かめた。そして誰もいない事を確認すると、脅えた目で彼を見ているハマーンに向かってこう囁いた。

「大丈夫。僕は何もしない。……安心して……」

「あ……ああっ……いやっ……来ないで……お願い……」

「怖がらないで聞いて欲しい……僕は何もしない。……僕の言う事が判るかい？」

アムロの優しい声に、ハマーンは脅えながらも頷いた。アムロはそれを確認すると、ハマーンの側まで近付いてしゃがむと、彼女の目を見つめながら幾つかの質問をした。

「貴方の他に……誰か他にいますか？」

首を横に振って答えるハマーン。

「では、大変失礼な事を聞くけど……君は……誰かに……その……強姦された……のですか？」

その問いにも、首を横に振って答えるハマーン。

「それなら……これは貴方が、御自分で行ってる行為……なのですか？」

その問いに、一瞬躊躇しながらも、ハマーンは目をつむりながら思い切って首を盾に振った。それは、シヤア以外の男性に自分の変態的な性癖を知られてしまった瞬間だった。

『ああ……言っちゃった……遂に……言っちゃった……私……どうなるんだろう……』

頭の中で様々な展開を想像して、それがグルグルと渦巻くハマーンだったが、そんな彼女にアムロが

発した言葉は、とつても意外な言葉だった。

「あ……あの……その……公共の場とはいえ、大変失礼しました。こんな時代なので貴方がこういう事をしたがるお気持ちもよく判ります。実は私は貴方が乗ってきた車で街に連れて行って欲しかっただけなのですが……」

そう言つて、立ち上がるアムロ。

「あ……ああ……あの……」

「そう脅えなくても大丈夫ですよ。でも野外での行為は程々にしないと、いつも私のような人ばかりだと限らないですよ。では……」

にこやかな笑顔でそう答えて、背中を向けて立ち去ろうとしたアムロに対して、ハマーンは恐怖で出ない声を、無理矢理絞り出してこう言った。

「まっ！……待って下さい！！」

「え？」

以外な言葉に振り返るアムロ。

「お願いを……私のお願いを聞いて貰えないでしょうか！？」

「僕が？……ですか？」

「はい……」

「と、言われても……」

ハマーンの言葉に困惑するアムロ。

「私を……公園のトイレまで連れて行って貰えないでしょうか？実は……もう足に力が入らないんです」
事実、長時間浣腸を我慢していたハマーンの体は、脂汗を全身に流しており、更に鳥肌を立てながら震えていて、端から見ても既に我慢の限界を超えているように見えた。

「歩けないのですか？」

「は……はい」

「手錠の鍵は？」

「……公園のトイレ内にあるアタッシュケースの中にあつて……外れないんです。そこまで構いませんから……どうか……お願いしま……す」

顔を真っ赤にしながら懇願するハマーンに対して、アムロは困った表情を一瞬したのだが、無言で彼女をそっと抱きかかえて公園の出口へと向かった。自分の服がハマーンに付いた泥で汚れるのもお構い無しに……。

「こういう事をする時は、危険の限界を見極めないと大変な事になりますよ」

目のやり場に困って恥ずかしい表情をしながらも笑顔でハマーンに話すアムロ。彼から発する優しい気は、ハマーンにもすっかり伝わってきていた。哀しい中にも優しさを持っている強い人間……シヤアとは似ているが違う人種の間人だと彼女は感じていた。アムロの胸に抱かれている間、ハマーンはほんの僅かな間ではあるが、排泄感の痛みを忘れて心の安らぎを得ていた

「何か……辛い事や苦しい事でもおありなんですか？」

「え？」

アムロの急な言葉に戸惑うハマーン。

「貴方のようなお美しい方がこの様な事をしているというのは……何か心の穴を埋める為にしているのでしょうか思えなかったもので……」

「……」

ハマーンが何も答えずに見つめていると、アムロは照れ笑いをしながらこう続けた。

「す……すみません。人の事をあれこれ散策するのは失礼ですよ。僕は貴方をトイレまでお送りしましたら、そのまま立ち去ります。後は他の方に見付からないように慎重にプレイなさって下さい」

ハマーンはアムロのこの言葉に、少しドキッとした。裸で全身を縄掛けして首輪と手錠をしている格好でいるというのに、一切手を出さずに優しく接してくれる男性……。

ハマーンは少し意地悪な質問を試してみた。

「貴方は私に……何かしようとは思わないんですか？」

「僕が?!ですか？」

「はい。私には貴方の心を動かすだけの魅力が無いのでしょうか？」

「そんな事は無いですよ。もし貴方を街で見かけたら、僕はつい目で追ってしまいますよ」

アムロの言葉に、ハマーンは社交辞令的な感じを受けた。

「でも、私は公衆の場所でこんな挑発的な姿をしていたのですよ。犯されても仕方が無いような姿でしたのですよ」

ハマーンは更に話を続けた。

「こんな私って最低ですよね……軽蔑しますよね……恥も外聞も無い変態露出狂女ですよね……私なんて……」

その言葉に、少し困った表情を浮かべながらも、アムロは優しく答えた。

「そんなに自分を卑下される事は無いですよ。確かに驚きはしましたが、貴方はとっても魅力的な方だと思いますよ。どのような素性の方かは判りませんが、ご立派な人生を歩んでこられた方だという事は、お話の仕方と発する気品でよく判ります。それに……失礼な話ですけど、僕の下半身はしっかりと固くなってますよ……はは……」

その言葉に、ハマーンは垂れ下がっている手をそつとアムロの股間に当ててみた。言葉の通り彼の股間のはち切れんばかりに勃起していた。急に股間を触られたアムロは、驚いてハマーンを落としそうになり、必死に彼女を抱き締めた。

「びっくりしたあ……。貴方のような美しい女性に触られるのはとっても嬉しいのですが、いきなりというのは勘弁して下さいね」

アムロの優しい言葉にハマーンは心が癒されていくのを感じた。更に出会って最初に恋をした男性がこの人ならば、自分の人生もまた違ったモノになったかもしれない……と勝手な想像を巡らせたりもしていた。そうしていると、再び激しい排泄感が彼女を襲った。

「あ……あっ……ぐううううっ……！！！」

いきなり体をよじって、震えながら何かに耐えているハマーンに対して、アムロは慌てて声を掛けた。

「一体どうしたんです？どこかお体が悪いのですか？」

その言葉に対して、ハマーンは精一杯の声を絞り出して答えた。

「いいえ……そうじゃ……無いんです。！私のお腹……には……浣腸液が入って……いて……それが私を……」

見ず知らずの男性への恥ずかしい告白と、浣腸の苦しみで涙を浮かべながらポツポツと話すハマーン。その衝撃的な告白に驚くアムロだった。

「え……！」

「あと、私のお尻には……大きめのバイブが……埋め込まれ……て……いて、栓を……して……います。だから……はぁ……出すに……は……体のロープを……切って……バイブを出さないと……トイレに行けばナイフが……あああつ……！！！」

「……判りました」

アムロは顔を真っ赤そう答えた。ホワイトベースに乗っていた時、セイラさんとその手のプレーを何度となく経験していたので、そういう事をする人に対しての理解はあったのだが、他人のプレーを生で見ってしまうのはまた別な話だった。そんなアムロは、余りの衝撃な出会い、告白が続いた為、先程まで落ち込んでいた事をすっかり忘れていた。もちろん、ベルトーチカの事すらも……。

*

*

変態行為

やがてトイレの前に到着し、ハマーンの指示通りに身障者用トイレに二人で入った。そしてアムロは

ハマーンを一旦洋式便座に座らせ、掃除用具入れの所からアタッシュケースと洋服一式を取り、洗面台の所へ置いた。そして洋服のポケットから鍵を取り出して彼女の手錠を外してあげた。次にカッターを取りだしてハマーンにそつと手渡ししながらこう言った。

「これ以降は貴方自身で行って下さい。貴方も恥ずかしい姿を僕に見られるのは嫌でしょうから……では……」

立ち去ろうとするアムロを、ハマーンは半ば強引に腕を引っ張って止めた。

「え……まだ何か……？」

アムロの言葉に、ハマーンは顔を真っ赤にしながら言い放った。

「あの……会ったばかりの貴方に何度も頼むのは……はあ……変だとは思いますが……私が排泄するのを手伝って……頂けませんか……？」

「え……でもその……」

返答に困るアムロ。

「こんな変態と共に……はあ……いたくないという気持ちは……うっ！……よく判ります。……でも、私は……こうでもして……自分を貶めて……はあはあ……汚して屈辱にまみれないと……辛くて……苦しくて……ううっ……耐えられないんです！」

ハマーンの間から大粒の涙がポロポロと流れた。普段決して人の前で感情を見せたことがない彼女が、アムロの前で素直な気持ちで自分の心の内を話していた。その言葉に、アムロはしばらくハマーンを無言で見つめた。すると、涙を流しながら排泄感で苦しい表情を見せている彼女の中に、一瞬なぜか懐か

しい雰囲気を感じた。

アムロは一瞬驚いたが、その自分の感じた心を信じてこう言うのだった。

「判りました。僕に出来る事でしたら手伝わせて頂きます。ただし……服が汚れるとまずいので、裸になる事だけは許して下さい。それと僕も男だ……。貴方のような女性を前にして最後まで紳士でいられるという保証は出来ません。もしかしたら獣のようになって貴方の心に大きな傷を付けてしまうかもしれません。それでも……構わないと言うのでしたら……」

アムロの言葉に、ハマーンはコクリと頷いた。

「では、少し待って下さい」

そう言うとアムロは服を全て脱ぎ、洗面所の上に置いた。体中に歴戦の傷があり、シャツとはまた違ったたくましい男性の体だった。

身障者用トイレの中で、裸の男女が変態行為をしている……その異様な雰囲気は、アムロの下半身を固くするには充分な要因であった。

『ああ……それ……欲しい……』

ハマーンは心の欲求を必死に押さえながら、左手でアヌスのバイブを押さえて、右手で体を縛っている縄を切り始めた。そして縄を解いたハマーンは洋式便器の便座を上げ、にアムロの方を向きながら、便器の縁に足を載せて和式便器で用を足す姿勢をとった。ただし、長時間の浣腸で体のバランスが取れないので、アムロが前で彼女の支え役となった。その際中、ヴァギナに埋め込んでいたバイブがヌルりと下に落ちた。

「あっ……!!」

洋式便器の中に落ちたバイブを、アムロは嫌な顔ひとつせずに取り、側にある水タンクの上に置いた。

「あ……ありがとうございます……」

「どういたしまして」

そう言いながら手を洗い彼女の側に戻ってきたアムロは、ハマーンの髪をやさしくなでてこう言った。

「では……そろそろ……始めましょうか。さあ、気を楽しませて……」

「は……はい……」

ハマーンはアヌスに埋め込まれているバイブをゆっくりと抜いていった。すると完全に抜き終わらない内に茶色の生暖かい液が噴き出して、ハマーンの右手に大量に付着した。そして抜き終わって栓が無くなったアヌスからは、大量の浣腸液と便が一気に吹き出てきた。排泄の音がトイレ中に響き渡る。

「あっ……ああああっ……くう……!!」

バイブを側に放り投げて必死にアムロにしがみつくハマーン。

「ああ……出る……いっぱい出るの……恥ずかしい……恥ずかしいよお……!!」

顔を真っ赤にしながら排泄し続けるハマーンを、アムロは優しい目をしながら、そして時折軽く頭を撫でてあげながら見つめていた。

「くううう……!!」

一気に排出した反動で、腹がシクシク痛むハマーン。そうしている間にも、アヌスからは柔らかい便が断続的に排出されていた。便器の回りは、排便で飛散したモノが飛び散っており、彼女の足はもとよ

り アムロの下半身にも大量に付着していた。ハマーンはそれを見ると、顔を上げて済まなさそうに言った。

「貴方の体に私のモノが……ご免なさい……本当にご免なさい……」

「まあ……その為に裸になったのですから……気にしないで……今は自分の事だけ考えて……」

「はい……」

そう答えるハマーンのの前には、アムロの固く立派なペニスがあった。ハマーンはゴクリと唾を飲み込んでそれを見つめた後、片手を沿えてそつと口に含んだ。

「あ……」

急なハマーンの行動に驚くアムロだったが、彼女の上目使いに懇願した顔を見せられては了解するしかなかった。

「どうぞ……僕としては嬉しい行為です……好きにして構いませんよ」

「はい……。ああ……大きい……」

シャアよりも太いペニスをハマーンは嬉しそうに舌でなめ回し、吸い、手でしごいた。ハマーンこれらのテクニクはは、戦場での敵であったシャアに仕込まれたという事を、今のアムロは当然ながら知る由もなかった。ハマーンは時々便意が襲い、排泄の為に力を入れた時うっかり噛みそうになる事が何度もあったが、そんな時でもアムロは一瞬ビクツとするのだが、終始優しく接してくれていた。

どの位経ったのだろうか……グリセリン浣腸の排泄が一段落すると、ハマーンはアムロに頼んで水道の水を浣腸してくれるようお願いした。一回一リットル位の浣腸を三〜四回位はしたであろうか……

トイレに排泄液が勢い良く噴き出す音が何度も響き渡った。そして排泄している間、ハマーンはアムロのペニスをとても愛しそうになめ回していた。そうしていると、アムロが彼女の髪を優しく撫でながら、少し苦しうま表情をしながら言った。

「そろそろ……口を……離して下さい。僕はもう……」

「口で……このまま出して……」

「い……いいのですか？」

「はい……貴方のモノでしたら……喜んで……」

アムロは絶え間なく襲う快樂の波をしばらくの間我慢していたのだ。だがそれも、ハマーンの舌技の前に限界を迎える時が来た。

「あ……！出る……」

「はい……」

やがてアムロの体が硬直したかと思うと、ペニスが一瞬更に固く膨らみ、先端から彼のミルクが勢い良くハマーンの口の中へ吹き出した。

『ああん……』

正常な精神状態の時ならば、精液はヌルヌルしていて生臭いだけのモノなのであるが、興奮状態にある今のハマーンには久しぶりに味わう服従の証であり、その臭い、味がとても愛しく感じられた。

『ああっ……これ……これが欲しかったの……』

会ったばかりではあるが、心を許せる男のミルクを口で受ける……そしてそれを嬉しそうに味わい、

飲み込むハマーン……。やがてアムロの射精が収まり、尿道に残ったミルクを愛しそうに吸い出した彼女は、便器の縁から降りるとアムロにそっと抱き付いた。

急な行動に一瞬戸惑うアムロだったが、甘える恋人をあやすようにそっと包むように抱き締めた。お互いの気持ちが伝わり合ってくる。

その瞬間アムロはハツとした表情をしたかと思うと、ゆっくりとハマーンを自分から離すのだった。

「どうしました？」

「ゴメン。これ以上心を通い合わせてしまうと、僕は貴方の心の中を覗いてしまう事になる。実は僕、『ニュータイプ』と呼ばれる人間なんです」

それはハマーンにも言える事だった。事実彼女にもアムロと抱き合った時、彼の思考が少し流れてきたのだ。

「私も……貴方の心の中を少しですが……」

その言葉にアムロはこう言うのだった？

「もしや貴方も……『ニュータイプ』なのですか？」

一瞬躊躇ったのだが、首を静かに縦に振るハマーン。

「そうだったのですか……なら……貴方の苦しんでいる理由が少しだけ判ったような気がしますよ」

「……どういう事ですか？」

「今の世の中では、ニュータイプはまだ異端でしか無い存在です。他人と解り合うようになるにはまだ時間が必要でしょう。それに正しい道が見えているのにも関わらず……人は同じ過ちを何度も繰り返し

てしまう生き物です。いくら僕が正しい事を言った所で、すぐに世の中が変わる程人は賢く無いんですよ……。そんな訳で……とっても辛い事を沢山経験しましたよ。もしかして……貴方も、そうなのではありませんか？」

アムロの言葉は半分正解だった。ハマーンは逆にアムロに対して質問してみた。

「貴方は……御自分がニュータイプだという事を嘆いていらっしやるのですか？」

「僕が？……ですか？確かに……そう思った事もありましたね」

アムロはそう言つて一瞬視線をそらした後、少しためらいながらも、淡々と話を続けた。

「僕は……戦場でとても大切な人をこの手で殺してしまつたんです。その瞬間の事……伝わってきた彼女の最後の想いは……今でも心から焼き付いて離れませんよ……。それに僕は僕の事をずっと思つてくられていた人すら幸せに出来なかつた……。相手の心が判るという事は、時にはとても辛い思いをする事もありますよね……。戦争が終わつてからしばらくの間はずっと悩んでましたよ。僕は生きてちやいけない人間なのだろうか？……つてね。僕は割り切つて生きられる程……強く無いですから……。そしてお決まりの酒と女に逃げて……堕ちる所まで堕ちて……でもなんとか立ち直つて生きてきましたよ」

「貴方は……兵隊さん……なのでしょうか？」

ハマーンは探るような感じで聞いた。

「ええ、以前はね。一年戦争時には連邦の軍人としてモビルスーツに乗ってました」

「今は？」

「今ですか？……もう退役してのんびり暮らしてますよ。このコロニーには父の墓参りで寄つたんです」

アムロの言葉にハマーンは少し違和感を感じていた。彼の持つ雰囲気は、退役した軍人のモノではなくて、シャアと同じく戦場で戦士が発している雰囲気そのものだからだ。そうしていると、今度はアムロが逆に問いかけてきた。

「貴方はこのコロニーの方なのですか？」

「私？……アク……いえ、ジオン……元サイド3の人間です。今は別のサイドへ引っ越しましたが、ここへは友達と観光で……」

とつさに話を作るハマーンだったが、お互いニュータイプ同士であるからどこまで嘘を見透かされているか判らなかつた。だがアムロは彼女に意外な言葉を言った。

「ジオンの人間だというなら貴方には連邦の軍人だった僕を恨む権利があります。もし貴方の隣人や家族が連邦の人に殺されていて復讐したいと思っているなら、遠慮なく僕を殺しなさい。それで貴方の気が晴れるというなら……ね」

詭弁なのかもしれないが、出会ったばかりの人間……それもジオン側の人間にそこまで言い切る男に、ハマーンは何とも言えない想いを抱きつつあった。シャアとは性質が違うが、彼も同じようにハマーンの心を動かす魅力を秘めている男なのだ。

「私は……貴方の命を奪おうとは思いません。確かに貴方は敵側の兵士でしたが、今の貴方の言葉には尊敬の念すら覚えます。……その代わり……」

ハマーンは一旦躊躇したが、意を決してアムロに言った。

「私の気が済むまで……この行為に付き合ってくださいませんか？」

突然の事に驚くアムロ。

「でも……僕は貴方の心の中が見えてしまうかもしれないですよ。そんな事……」

「貴方はそれを見たからといって、私への態度を変えるような人では無いと思いましたが？」

一瞬返答に困ったアムロだったが、ハマーンの真剣な目を見ると、優しくこう答えた。

「判りました。なるべく貴方の心を覗かないように務めます。それで……いいでしょうか？」

「はい。充分です」

ニュータイプといえども、TVドラマの超能力者の様に四六時中相手の心を覗けるという訳でもないのだが、そう言ってくれる事がハマーンには嬉しかった。そうしていると、アムロはハマーンを抱き寄せてそっとキスをした。先程自分のミルクをハマーンの口に出したばかりであり、まだ匂いと味が残っているのが判る筈なのに……。シャアですら自分が出した後は決してキスをしてくれなかったというのに……。

「今だけの事で構いませんから……こんな私を……愛して下さいますか？」

唇を離して上目使いに言うハマーンに対してアムロは優しく応えた。

「貴方が私を愛してくれるというのなら喜んで……」

その言葉を皮切りにアムロとハマーンは（この時点でもお互いの名前は明かさないままなのだが……）身障者トイレの中で激しく愛を交わすのだった。

軽いキスから始まり、その後ディープキスへと移り、立ちながら優しく、時には激しく愛撫を交わした。また、ハマーンが彼のペニスを愛しそうにしゃぶれば、お返しにアムロも彼女のヴァギナを優し

く丁寧に舐め回した。そしてお互いの気持ちが高ぶった頃を見計らって、ハマーンが便座の上に座って股を広げてアムロを受け入れた。技術的にはシヤアの方が上手いのであるが、満足感ではアムロの方が遙かに上だった。彼に突かれる度に彼なりの優しさが伝わって来る。これは生まれながらの物ではなく、人生を経験して得た優しさだった。

「あ……あん……気持ち……いい」

ハマーンがこれ程純粹にセックスだけで満足を得たのは、アステロイドにいた時、シヤアにSMプレイを教え込まれる前以来の事だった。刺激という快感だけを言えば、シヤアとの行為やいつも自分がやっている自虐プレイの方が遙かに強烈なのだが、興奮が冷めた後の何とも言えない悲しさと辛さ……それを癒す為にまた同じ事を繰り返してしまう……それも更に強い刺激を求めて……。

しばらくその体位で愛し合っていた二人だったが、動き辛かったのかアムロが一瞬動きを止めた時にハマーンがこう耳元で囁いた。

「今度は後ろから……愛して下さい」

そう言うとハマーンはアムロのペニスを抜いて立ち上がり側にあったアヌス用のバイブを手にした。そして水道水で軽く洗った後、一旦その場でしゃがむと手に持っていたバイブを後ろの穴に埋め込んだ。バイブは浣腸で緩くなっているその部分に、意外なほど呆気なく収まっていった。おまけに電池がまだ残っており、時々強弱を付けた動きが、ハマーンを更に淫乱にさせた。

準備が終わるとハマーンはアムロの側まで近付き、トイレの壁に手から肘までを突き腰を曲げて前屈みの姿になった。アムロは無言でハマーンの後ろに立ちペニスを入れようとした。それをハマーンが手

で誘導し、すんなりと合体することが出来た。アムロはハマーンの腰に手をやり、強弱を付けながらじっくりと愛した。それに後ろの穴に埋め込んだバイブの振動が加わって彼女を刺激し続けた。

「あ……ああっ……凄………とっっても………気持ちいいの!!」

物理的な快感の他にも、精神的な快感が加わり、ハマーンは今までに無い様な快楽を得ていた。

「なに………これ………とっってもいい!いいの!………もっ………もっ………もっ………!!」

激しく、しかしとても優しくピストン運動を行うアムロ。彼は右手でハマーンの後ろの穴に埋め込まれているバイブを前後に移動させたりして刺激し始めた。

「あっ!ああんっ!それ………気持ちいい!もっ………もっ………もっ………!!」

狂ったように腰を振るハマーン。そんな時間がどの位流れただろうか。アムロが少し苦しそうな感じ
で言い放った。

「もう………出そうだ………」

「なら………ああっ!中に出して!!」

「え!………でも………」

「貴方が欲しいの!………お願い!」

「ああ………だっ!………出るよ!」

「はい!私も………イクツウウウウウ!!」

下半身が痺れるような感覚を発した後、アムロのペニスからミルクが勢い良くハマーンの中に注ぎ込まれた。それを肌で感じつつ、ハマーンも一緒に絶頂感を迎えた。

二人はしばらくの間結合したまま余韻に浸っていた。やがてアムロがゆっくりとペニスを抜いた。ヴアギナからは彼のミルクが溢れてきて、太股を伝って足首の方へ流れて落ちた。また、アヌスからはバィブがニュルンと滑るような感じで吐き出されて床に落ちた。

「はあ……はあ……」

やがてハマーンはその姿勢のままゆっくりと床に膝を付いた。

「大丈夫かい？」

アムロが心配そうに声を掛けた。

「はい……。余りにも気持ちよかったです……。つい……」

「僕もこんなに気持ち良かったのは久しぶりだったよ……。ありがとうございます」

「ううん……。こんな私で感じて下さいまして……。私の方こそ嬉しいです……」

軽く唇を重ねる二人。ハマーンは今、心の底から満足感に浸っていた。シェアとの性行為を続ける内に、いつの間にか忘れていた心と心を優しく通わせる喜びというものを……。

「では君は少し休んで下さい。僕はこの部屋を少し片付けますから……」

そう言うとアムロは便器や床に飛び散ったハマーンの排泄物を丁寧に掃除し始めた。そして、ハマーンが使用していた二つのバィブを丁寧に洗ってアタッシュケースに入れ、使った縄はその場に捨てる訳にはいかなかった。袋の中にまとめて持って帰る事にした。その後アタッシュケースの中からタオルを取り出して、泥や愛液や自分の排泄物が付着しているハマーンを綺麗に拭いてあげた。

「あ……私が自分で……」

「ううん。僕にやらせて下さい……貴方はそのままじっとして……」

アムロの優しさが伝わってくる。ハマーンは今、非日常的な状況の中で現実を忘れてとても幸せな気持ちになっていた。まるでずっと昔から付き合っていた恋人との行為を終えた時のように……。

ハマーンの体を吹き終わると、アムロは自分の体を拭いた後に服を着始めた。その後腰が抜けてうまく服を着ることが出来ないハマーンを手伝った後、肩を貸して身障者用トイレの出口へ向かった。

慎重にトイレのドアを開けて外を見ると、既に日が暮れていた。辺りを見回して人気がない事を確かめると、何事もなかったかのように電気自動車に乗り込み、急いでその場を立ち去った。

*

*

帰路

街灯が照らす道路を、二人は繁華街の方へと車を走らせていた。

「あの……街まで送って頂けるなんて……本当に助かります」

アムロが恐縮そうな感じで言った。

「お気になさらないで下さい。私の頼みを聞いてくれましたし、その為にかなり時間も経ってしまったのですから……これ位のお礼はさせて下さい」

車を運転しながら、とても優しい口調でハマーンが答えた。

「……僕達……結構匂ってるかもしれないですね。ホテルに着いたら直ぐにシャワーを浴びないと……」
アムロが袖の臭いを嗅ぎながら言った。

「そう言えば、泊まっているのはどの辺りなんですか？」

「繁華街から少し離れた場所にあるアミールという安宿ですよ」

「ああ…あそこですね…。で、明日のご予定は？」

その言葉にアムロは上を指差した。頭上にはコロニーの反対側にある街が見える。

「この丁度上の方にあるギツツアという街で友達と会う約束をしています。……あつ……車が無いんだっ
た」

「どうされたのですか？」

「いや、父の墓参りの帰り道でレンタカーが故障して、業者に連絡したらその場に放置しておいてくれ
つて言われましたよ。代車も急には用意できないとか……」

「相変わらずコロニーの業者はいい加減な仕事をしてるのでね……」

「ええ……」

「その結果、私が露出プレーを楽しんでいた公園に来たという訳なのですね？」

「まあ……そういう事です」

アムロはそつと視線を逸らしながら、頬を赤らめて答えた。

「私……貴方に見付かった時は……もう全てが終わったと思いました」

「ふふっ、でも私だから良かったんですよ。他の人だったらどうなっていたか……性癖は人それぞれで
すから仕方ないですが……公衆の場所でプレイするのは、僕はお薦め出来ませんよ」

「はい……慎みます……」

その後しばらく会話が無いまま時だけが優しく流れていった。やがて、ハマーンの方からポツリと話し始めた。

「実は私……とつても愛していた人がいたんです。彼も私を最初はとつても愛してくれていたと思っただのですが……いつの間にか心がすれ違って……。そんな時SMプレーをしてみたらお互い気に入ってしまった……でもどんどんエスカレートして……」

「その彼とは……？」

アムロの問いに一瞬言葉が詰まるハマーンだったが、やがて静かに話始めた。

「この前久しぶりに会ったのですが……やはりお互い歩み寄る事は出来ませんでした。もう……会う事も無いでしょう……」

「そうですか……。でも……まだ……諦め切れないのですか？」

ハマーンは無言でコクリと頷いた。

「僕が貴方に言えることは、時間が解決してくれるかもしれない……としか……」

アムロの精一杯の慰め？にハマーンは少し心が和むのだった。

「ふふっ。そう言ってくれるだけで嬉しいです。貴方は本当に優しい方なのですね。ホント……貴方が私の彼だったら良かったのに……」

「僕ですか？僕はそんな出来た男じゃありませんよ。いい加減で優柔不断で……」

そう言いつつ、夜景を眺めるアムロ。その姿にハマーンの鼓動が高鳴りを覚え、思わずこんな事を訪ねてしまうのだった。

「失礼ですが、お付き合いしてる女性の方は？」

その言葉に一瞬躊躇するアムロだったが、やがてポツリと話し始めた。

「その……僕はまだ了承してないのですが、僕を慕ってくれる人が……います。僕に興味を持って僕の為に色々やってくれる……見た目よりもしっかりした娘です。僕はそんな彼女に僕の過去を全て話してあげたのですが、『それでも構わない。過去はもう終わった事よ。私が大切だと思うのは未来だから』って答えてくれました」

「そうなのですか……。ずいぶん積極的な女性ですね。私もそれ位、あの人に尽くす事が出来たら……幸せになれたかもなあ……」

「でも正直大変なんですよ。『昨日なにやってたの？』『あの話してた女の人は誰？』とか毎日ですよ……。貴方との事がバレたら一体僕はどうなる事か……」

「ふふふ……その娘もニュータイプなのですか？」

「幸か不幸かオールドタイプなので助かりますよ。……今日の事は墓場まで持っていけます」

「私の我が儘に付き合っただけなのに……すみません……」

「いえ、お互い様ですから。僕もお陰で哀しい日だったのに何か吹っ切れた気がしますよ……」

「それは……何よりです……」

そうしていると、車は繁華街に入った。その時ハーマンは唐突にこう言うのだった。

「あの……よろしければこの車、お借りしませんか？私なら友達がもう一台借りてますので何も問題無いですし、お店に電話さえすれば問題ない筈ですよ」

「それはとっても嬉しい事ですが……流石にそこまで甘える訳には……」

「私が貴方を気に入ったからなんです……理由にならないでしょうか？」

アムロは少し考えた後にこう答えた。

「判りました。そのご厚意……ありがたくお受けさせていただきます」

「では、失礼ですが貴方様の名前を聞かせてくれませんか？」

「あ……今まで名乗ってませんでしたね……」

そう言うと、一瞬の間を置いて言った。

「アムロ・レイです」

その瞬間、ハマーンの表情が驚きが変わった。シヤアからよく聞かされた一年戦争での連邦軍の英雄であるアムロ・レイ……それが彼だったのだ。彼が今も連邦の兵士であろうとは想像していたが、自分の恥ずかしい姿を目撃され、肉体関係を持った男がシヤアと戦場で何度も戦った男だったとは……。

「アムロ・レイって……あの木馬……いえ、ホワイトベースに乗っていたアムロ・レイですか？」

「はい」

アムロはそう答えた後、ハマーンの表情を見ながら、話を続けた。

「……もし貴方が僕をアムロ・レイだと判った上で、かつジオンの人間として僕の事を憎むようでしたら、遠慮なくこの場で降ろして下さっても構いません。罵声も甘んじて受け止めますし、先程私が言ったように……」

緊張した表情で話すアムロに対して、ハマーンは優しく答えた。

「……確かに貴方は連邦軍の兵士としてジオンと戦った事は事実ですが、私が貴方の立場でしたらやはり同じように連邦軍の兵士として戦った事でしょう。それに連邦の上層部は憎むべき存在ですが、貴方を憎んだ所で世の中は変わりません。また、貴方はジオン出身である私の事を心の底から心配してくれた上に、私を昔からの彼女のように、とても愛しく接してくれました。むしろ私の方がお礼を言いたい位です」

「そんな……僕は当たり前の事をしただけです……」

アムロは一瞬躊躇った後、照れながらもこう言い出すのだった。

「あ……あの……もし……その……貴方に……方が一子供が出来た場合……責任を取らせて下さい」

真剣に話すアムロに対して、ハマーンは自分の鼓動の高鳴りを感じていた。ハマーンは仮に妊娠したとしても、敵であるアムロに対してそれを言えない事位は充分過ぎる位判っていた。だが、そう言ってくれた事がとても嬉しかったのだ。

「その好意だけ受け取っておきます。でも私は今日、安全日なので……たぶん大丈夫だと思いますよ」

本当は危険日なのだが、彼を安心させる為にわざとそう言ったのだ。その言葉に対して、アムロはこう答えた。

「とは言え、もし出来た場合は、このコロニーの管財人協会にいるワトソンという方に連絡を下さい。

その方は私の父の件で色々お世話になった方なので、私が生きている限りはその方と定期的に連絡を取りますから……」

「ありがとう……」

自分の敵になるかもしれない男とこんな関係になり、それどころか心を許している……昨日までの自分からは想像も出来なかった。

「では、貴方が泊まっている所まで行つて、そこで僕が車を譲ってもらおうという事でいいでしょうか？」
アムロの言葉に対して、ハマーンはこう答えた。

「なら、私の友達に来て貰もらつて、そこで車をお渡しします。私が泊まっているホテルは街外れにありますし……」

「僕はそれでも構いませんよ。お友達が来るまでの間、その辺の喫茶店でお茶でも飲んで話をすると言うのも悪くないですしね」

ハマーンは、にこやかに答えるアムロに対して、少し胸を高鳴らせながらこう言うのだった。

「ならば……その……あの……あと二〜三時間程一緒でも大丈夫ですか？」

「え？ええ……構いませんよ。その位でしたら喜んで……」

「本当に？」

「はい。これも縁でしょうからね」

「……縁……確かにそうかもしれませんが。ふふっ」

嬉しそうに微笑むハマーンを、少し不思議そうな目で見ていたアムロだったが、やがて彼女が微笑んでいた理由が判った。車は繁華街にある連れ込みホテル（とは言え割と高級なタイプ）に入った。

「あの……もしかして二〜三時間というのは……」

「はい……お別れする前にもう一回……トイレでは無くてベッドの上で貴方と……ダメ？でしょうか」

…？」

上目使いで懇願するハマーンに、アムロは困惑するのだが覚悟を決めてこう答えた。

「貴方は本当に積極的な方なんですね」

「やはり男性の方はこんな性格の女性は嫌いですか？」

悲しそうな表情をするハマーンに、アムロは彼女の目を見ながらこう答えるのだった。

「人それぞれだとは思いますが…僕はそういう性格は嫌いじゃないですよ。でも、…何度も言いますけど…本当に僕でいいのですか？」

「はい…貴方だからこそ…」

「それで貴方が満足するのですたら…僕に断る理由なんてありませんよ」

「…ありがとうございます…アムロ…好き」

そっとアムロに口づけをするハマーン。そんな彼女の髪をそっと撫でるアムロ。そして、地下に車を止めて、腕を組みながら肩を寄せ合って歩く二人は、どこから見ても恋人同士にしか見えなかった。

*

*

満たされる心

ホテルの部屋に入ると、ハマーンはナナイの所に連絡した。そして三時間後にホテルの近くまで車で来て待機しているように伝えた。次にレンタカー屋に連絡して、借り主の名義（ハマーンは偽名で車を借りている）をアムロに変更して貰った。その次にホテルのフロントに連絡して、二人の着ている服を

帰りの時間までクリーニングしておくように告げた。(入り口の側に服を入れておく箱があり、ホテルの使用人が回収して帰りの時間までに仕上げるシステム。使用人が回収する時に部屋内の人間が裸でも見えないように、部屋が二重扉になっている等工夫されている)

それが終わった後、ハマーンは先にシャワーを浴びているアムロの所へ行った。扉を開けるとアムロが優しい表情で迎えてくれた。

「レンタカーの名義を変更したわ。貴方の認証で動くはずよ」

「ありがとう。助かるよ」

「いいえ、貴方が私にしてくれた事に比べたら……」

そう言うと、ハマーンはアムロに抱き付き、強引に唇を奪った。舌を絡め、濃厚なキスがしばらく続いた。

「そう言えば、君の名前をまだ聞いてなかった……」

「私の……名前？」

「そう。これからベッドで愛し合うのに、貴方の名前位知っておかないと……」

「ええ……そうね……」

そう答えはしたが、まさか自分がネオ・ジオンのハマーンだと名乗る訳にもいかず、とっさにこの名前を口にしたのだった。

「アルテイシア……『アル』って呼んで」

「ア……アルテイシアさんか……良い名前だ。そう言えば僕の知ってる方も幼い時にそう呼んでたと言

つてたなあ」

「それは、『セイラ・マス』様の事かしら？」

「あっ、彼女を知ってるのかい？」

「ジオンの人間ですもの。それ位は当然よ」

「じゃ、僕と一緒に船に乗ってた事もかい？」

「ホワイトベースに乗ってたのは聞いた事があるわ。セイラ様はジオン・ダイクン様の娘だし、私と同じ名前なので……気になってたしね。それに、私の愛した人がセイラ様を好きでよく語ってくれたもの」

「へえ……」

「私のこの髪型だって、彼がセイラ様の髪型を余りにも褒めるもので、つい嫉妬してやってみたらかなり気に入ってくれたから……」

ハマーンは複雑な表情を浮かべながら言った。

「よっぽど君の愛した人はセイラさんが好きだったみたいだね」

「ええ……本当に病的な位だったわ……。そう言えば、セイラ様は今どうしてらっしゃるの？」

「残念だけど船を降りてからはもう会ってないんだ……」

「そう……なの」

残念そうに言うハマーンに、アムロは彼女の髪をそつと撫でながら、耳元でこう言った。

「あの方が僕を一人前の『男』にしてくれたんだ。そんな人と同じ名前、同じ髪型の貴方とこういう事をするというのは、何だか不思議な縁を感じるよ」

それは、ハマーンも同じだった。自分が愛し、様々な調教を受けた男と、その妹と関係を持ったアムロと肌を重ねる……。

「アル……愛してるよ……」

「うん……」

そう言いながら、再び濃厚なキスをする二人。やがてアムロの手がハマーンの胸、腰、股間に延び、シャワーが降り注ぐ中でしばらくの間ハマーンの愛しい声が響き渡った。

「そう言えば乳首とあそこにピアスをしてるんだね」

「うん……。でもその面と向かって言われると恥ずかしいな……」

「でもそういう行為が好きだから、あんな場所で露出プレーをしていたのかい？」

「そうなの……私はそういう事でしか快感を得られない嫌らしい変態女だから……。でも、今はそういう事無しでアムロ……貴方と……結ばれたい……」

「……時間はたっぷりある……楽しむもう」

「はいっ。あんっ！」

クリトリスを優しく触られたハマーンは、思わず声をあげてしまった。それを聞いたアムロはこう言うのだった。

「続きは……ベッドの上で……ね」

「はい……アムロ……」

火照った体で頬を赤らめながらうつとりとした表情で答えるハマーンだった。

ベッドに移った二人は、それこそ以前から深く愛し合っている仲のように、キスをし、腕を絡め合い、相手の体を舐め、愛撫するのだった。どの位その様な行為を続けた事だろう。シックスナインの格好で、ハマーンが上になりアムロのペニスを愛しく攻めていた時、アムロがこう言った。

「アル……君は本当に男の人の感じる所を攻めるのが上手いね」

「ええ……私の愛した人に徹底的に調教されたから……」

「辛かったかい？」

「ううん。その方の喜ぶ顔が見たくて必死だったから……辛いとは思った事が無かったわ。むしろ尽くしている幸せの方が強かったかな……？」

「それで……こんな技術を……ああっ……ダメだ……もう出そう……」

「出して。全部飲んであげる」

ハマーンは右手でペニスをしごき、左手で袋とアヌスの中間辺りを撫でながら、ペニスの先端部分を舌で丁寧に舐めていた。すると……。

「ああっ……出る……出るよ！」

その声の直後、ペニスが一瞬膨らんだかと思うと痙攣を始め、ハマーンの口の中に大量のミルクを噴射した。右手の動きを徐々にゆるめていくハマーン。やがて彼女は、口一杯に溜まったミルクをうつとりとした目をしながらアムロの前で飲み込んだ。

「ごちそうさま」

「ふう……もう少し我慢出来ると思っただけだなあ……」

「連邦の英雄さんは化け物って聞いてたけど……普通の男なのね。精力絶倫で何人もの女性を囲っているという噂だったわよ」

「そんなモノは戦後に流れたデマだよ。僕をよく思わなかった連邦の奴らが、僕を貶めるために色々な話を流しまくったからね……」

「貴方も……大変だったのね……」

「まあ……ね。でも、色々な事があったけど、そんな結果、今、君と出会えて愛し合っているんだから……人生嫌な事ばかりじゃないのかもね」

そう言いながら、ハマーンの股間に顔を埋めるアムロ。

「あ……あんっ！」

「まだ終わらせないよ……アル」

「もちろんよ……アムロ……」

二人の戯れはこの後も時間の許す限り続けられた。

その後二人は正常位とバックで一回ずつ絶頂を迎えた。アムロはともかくハマーンはナナイとの行為では一回も絶頂感を得られなかったのではあるが、今回は心が満たされている為かいずれも深く、長く絶頂を感じていた。

やがてホテルを出る時間が迫っており、これが最後の行為になるだろうという時、アムロがハマーンの胸を優しく吸いながらこう言った。

「時間的にこれが最後になると思うが……最後は……その……後ろの穴でさせて貰えないか？」

アムロの言葉に、一瞬驚いた表情をするハマーン。

「アムロ、アナルセックスに興味あるの？」

「う……うん。でも、なかなか……機会が……ね」

「経験は？」

「数回程……セイラさんと……」

「排泄物の匂いとかは気にならないの？」

「それは大丈夫……セイラさんはスカトロ系のプレーが好きだったから……あの頃は彼女にホント色々な事を教わったな……」

ハマーンは、ダイクン家には変態の血が流れているのでは無いかと思いつつこう答えた。

「だから私の性癖にも理解を示してくれた訳なのね」

「そう言う事……それともこんな僕は嫌いかい？」

その言葉にハマーンは首を横に振った。

「ううん。とつても大好き。もつと早く貴方と会いたかったわ……」

「僕もだよ……アル……」

正常位の姿勢のまま、アムロはペニスをハマーンのアヌスの方に当てた。

「あ……待って……」

ハマーンはベッドから起きあがるとアタッシュケースの中から瓶を取りだしてその液……ラブジュースをアヌスに大量に塗った。元々そんな液を塗らなくても、開発済みのアヌスは容易にアムロのペニスを

を受け入れるだろうが、念を押したのだった。また、今回まだ使用していないヴァギナ用のバイブから、割と大きめでグリグリ動くモノを選んだ。そのバイブをベッドの脇に置いて、ベッドの上で再び仰向けの姿になってアムロにこう言った。

「来て……」

固くなっているアムロのペニスをアヌスに導くハマーン。アムロが少し腰を前に出すと、割とすんなりペニスはアヌスの中に埋没していった。

「ああ……入った……」

アヌスの中がアムロのペニスで満たされているのが判る。肉体的な快感よりも精神的な快感の方が強い感じだった。ハマーンはアムロにこう言った。

「アムロ……持ってきたバイブを私の前の穴に……入れて……」

「判った……入れるよ」

アムロはバイブをゆっくりとヴァギナの中に埋めていった。こちらもヌルヌルの状態だった為、すんなりと埋没していく。そしてアムロは奥まで入った事を確認すると、バイブのスイッチを入れた。ブーンという振動音とギューンギューンという回転音が部屋に響き渡った。

「あつ！……ああん……気持ちいい……」

ハマーンが腰を浮かしながらよがりまくるのを見ると、アムロのペニスが更に大きく膨らんだ。ゆっくりとピストン運動を始めるアムロ。

「ああ……いい……とつても気持ちいい……アムロ……」

「僕も……気持ちいいよ……」

「キスして……激しく……!」

「あ……んんう……」

何度目かのディープキスを繰り返す二人。こうして濃厚なアナルセックスの時間がしばらくの間続いた。やがてアムロはハマーンをバックスタイルにした後、再びアヌスにペニスを入れた。ハマーンは四つん這いのままアムロのペニスを受け入れると股間のバイブを右手で激しく出し入れするのだった。

「ああ……気が狂いそう……気持ちよくて……ああん……」

激しく体を動かすハマーン。それと同じように激しく彼女のアヌスにペニスを出し入れするアムロ。

「で……出るよ!」

「出して!私も……そろそろ……あつ……ああつ!……イクウウウウ!!」

「ああっ……!!」

体を硬直させてハマーンにしがみ付くアムロ。その直後、ペニスの先からミルクがドクドクと発射され、それとほぼ同時にハマーンも深い絶頂感を迎えた。後ろからハマーンを強く抱き締めるアムロ。

やがて体が弛緩して、二人はそのままの体勢のままベッドに埋もれた。

「はあ……はあ……」

頭がクラクラする程の絶頂感を迎えて、ハマーンはベッドに埋もれながら余韻に浸っていると、アムロが側に寄り添い軽くキスをしながら髪を撫でた。

『そう言えばシヤアはこんな事……してくれた事無かったな……』

ハマーンはアムロとの行為が終わった後に、シャアの事を考えてしまう自分を少し嫌悪した。会ったばかりの自分の為にこんなに尽くしてくれた人が目の前にいるのに……。

でもそんな事を考えながらも、自分の体はやはりシャアのモノなんだと思うハマーンだった。アムロとの行為がどんなに自分を満たそうとも、彼女の体と乾き切った心は再びシャアとの過激で激しい行為を欲してしまう事に……。

『本当に……もつと早く出会えてたら……』

悔やんでも仕方がない事ではあるが、アムロの優しさが強いからこそ、余計にそう思ってしまうのだ。た。

「私……今日の事……一生忘れないわ……」

「僕も……」

その後、二人は一緒にシャワーを浴びて、入り口に戻されている服を身に付けてホテルを後にした。

*

*

追加事項：(2009年8月28日)

この前後のシーンの間に、サイドストーリー「戦慄の空間」が入ります。無くても話は成立しますが、そちらも合わせてお読み頂ければ幸いです。

別れ

二人はホテルを出て少し移動した所で車を止めた。ハマーンはそこで改めてナナイに連絡を取った。どの位経った頃だろうか、彼女らの側に車が一台留まり、ナナイが表向きは冷静な表情をしながら降りてきた。(ナナイにはハマーンが偽名でアルテイシアと名乗っている事を事前に告げている)

「アル！お待たせ！」

「遅かったじゃないの！」

「ゴメーン！道判んなくてさっ！迷っちゃった！」

事前に打ち合わせていた様に、観光客を装う二人だった。

「はい、言われた物持ってきたわよ！」

紙袋をハマーンに手渡すナナイ。

「ありがとう！」

そう言うとハマーンはアムロの方を向いてとても幸せな表情をしながらこう言うのだった。

「今日は色々ありがとう。これ……お礼にもならない物だけど……その内役に立つと思うわ」

「なんだろう？」

アムロが開けてみると、中には一枚のディスクが入っていた。

「ディスク？」

アムロが不思議そうに呟くと、ハマーンが耳元でそつと言った。

「私の恥ずかしい画像が沢山入ってるわ。楽しんでね」

その言葉に驚くアムロだったが、ハマーンは笑いながらこう言うのだった。

「ふふっ……冗談よ。冗談……でも大切なモノには間違いないわ。連邦側のモビルスーツに足りないモノがね……」

その言葉にアムロは眉をピクリと反応させた。

「今……何と……？」

その言葉を見ながらハマーンはこう言うのだった。

「そうそう、実はね、今日危険日だったのよ。……もし出来たら……責任取ってね！ア・ム・ロ」

「な……えっ！」

驚くアムロを見ながら微笑むハマーン。

「ははっ！アムロったら直ぐに引かかるんだからもう……」

そう言うとナナイと共に車に乗り込んだ。

「じゃ、お元気で……貴方とここで会えて本当に良かった……」

手を振りながらこちらを振り向くハマーンは、先程までアムロの前で見せていた優しい顔ではなくて、いつものキリッとした軍人の顔だった。

アムロはその変化に一瞬ドキッとしたが、自分同様彼女にも隠している事が色々あったのは薄々察していた。だが、父の亡くなった事を知った日が自分の中で忘れられない日になった事は確かだった。

「今日の事……ベルトーチカには絶対に言えないな……ははっ……」

そう言いながら、ハマーンから借り受けた車を運転して自分のホテルへと向かった。

一方ハマーンとナナイはアムロのホテルのとは反対の方向に車を走らせて、しばらくした所で角を曲がって停車した。ナナイが慌てた口調で話しかけた。

「ハマーン様！連絡が無くて心配してたんですよ！」

「すまない。ナナイ……色々あつてなかなか連絡出来なかった」

「先程の男性は？」

「彼か？……アムロ・レイだ。一年戦争でガンダムに乗っていた連邦の英雄だよ」

「ええ！あの人ですか！！？」

ナナイは目を丸くしながら驚いた。

「色々あつてな……彼と……その……」

その言葉に、ナナイは少し声を荒げて言った。

「はいはい。そういう訳ですね。道理で満足した顔をしてると思いましたがよ」

「焼いてるのか？」

「そりゃ、私はハマーン様を満足させられませんでしたがね」

少し嫉妬しているナナイを見ながら、ハマーンは可愛い子供を見てるような表情をしながらこう答えた。

「そうカリカリするな。お前には私がシャアから仕込まれた事をじっくりと教えてあげるから……覚悟して置け」

「は……はい……」

ナナイは頬を赤らめながら答えると、車を発車させて自分たちが宿泊しているホテルへと向かうのだ。これは、戦争の合間に、ほんの少しの平和な時間があつた時のお話……。

*

*

エピソード

その後、ネオ・ジオンの和平工作は結果から言えば不調で終わり、事実上生き残る最後の切り札を失った。相手側からすれば、シャアというカリスマの駒が無いネオ・ジオンでは民衆の指示が得られないので有形無形の支援は出来ないという事だった。自分達にとってメリットが無い事には投資しないという事なのだろう。

だが、スペースノイドの要人とのパイプが出来た事は、後の事……シャアが立ち上がる時の事を考えればプラスに作用するかもしれないとハマーンは思った。

アムロとの行為からしばらくした頃、アクシズにあるトイレで便座に座っているハマーンの姿があつた。その月の生理が来たからである。

(以下トイレでのハマーンの独り言)

「最近胸が張って痛かったけど……やっぱり来てしまったのね……」

生理痛が酷い為、ハマーンは薬が効くまでそこを動けなかった。

「アムロとの子供が出来るかと少しは期待したんだけどなあ……縁が無かったか……仕方ないわね……」

そう言い放つハマーン表情には、一抹の寂しさが垣間見えた。

ハマーンはナナイに短い期間ではあるが肉体的・精神的な調教、軍事学、帝王学の教育を可能な限り行い、シヤア好みの女性に仕立て上げた。元々ナナイはハマーンとかなり似ている部分が多い上に、頭が良く飲み込みが早かったのでさほど苦にはならなかったらしい。ハマーンとシヤアが決裂した最大の原因は、ハマーンが自ら動くことになってしまったからなので、ナナイにはどんな事があってもシヤアを前面に立たせて彼が表の顔、裏の顔（性生活）で暴走しないように徹底的に心でコントロールする事を教え込んだ。

また、アクシズでシヤアが去ってから開発した技術、隠し資産の口座等、ネオ・ジオンの重要な軍事機密を残らずナナイに託し、ジュードーとの最終決戦の前に彼女の軍籍を全て抹消してしばらくの間身を隠すように命令した。

（以下その時のハマーンとナナイの会話から）

「いずれシヤアが立ち上がる時期が来たら……頼むぞ」

「はい。……でも、その時……シヤア様は私を気に入って下さるでしょうか？」

「それは大丈夫だ。ヤツの好きな所は全てお前に教えた。私から『我』を取って、都合の良い時に母親代わりに変わってくれるような女性がヤツは好きなのだよ……」

「自分勝手……なんですね……シヤア様は……」

「まあ……実の妹にも悪戯して追い出された位だからな。変わり者だというのは覚悟しておけ」

「でも……そんな彼をハマーン様は愛してらっしゃるんですよね？」

「当たり前だ。だからこそお前に私の代わりを頼むのだ。そこを忘れるな」

「はっ」

この後、ナナイはネオ・ジオンを去り、ハマーンが言った事を忠実に実行していった。

アムロはその後サイド6で仲間との情報交換をした後、そのままそこで情報収集作業を継続していた時に戦争が終わった。元々戦力差があった上に、ネオ・ジオン内で分裂騒ぎがあつて同士討ちしたとあつては、アムロが戦場に出る必要は無かつたのだ。

その後、戦後の混乱で仕事に忙殺された為、ハマーンからの封筒の事をすっかり忘れていたが、ある日ホテルの自室で何気なくTVにネオ・ジオンがダカールを制圧した時に披露したパレードやパーティーの映像が流れた。画面に映ったネオ・ジオンの実質的指導者の顔を見た瞬間、彼の表情が一変し、持っていたコーヒーを落としそうになつた。

なぜなら、画面の中で凛々しく手を振っている女性が、あの日森林公園で出会った女性と同一人物だったからだ。アムロはネオ・ジオンとの抗争に直接関わっていなかった為、彼女の顔を今まで知らなかったとは言え、そんな身分の高い女性があの日一人で露出変態プレーをしており、成り行きとは自分と肌を重ねるとは……とても信じられなかつたからだ。

(以下その時のアムロの独り言)

「間違いない……あの時の彼女だ……」

一瞬言葉に詰まった後、更にこう言った。

「僕はハマーン・カーンとセックスをしたというのか……ははは……」

アムロはハマーンとの赤裸々な行為を頭の中で回想した。ネオ・ジオンの指導者として非常に振る舞ってはいるが、その表の顔を支える為、少女が必死に悩み、苦しみ、壊れそうになる心を快樂で押さえ込んでいた……想像を絶するプレッシャーに押し潰されぬ様に、自分を徹底的に痛め付けて心の中で自分を再認識させなければならぬ程、彼女は孤独だったのだ。

「……どう見ても普通の少女だったよなあ……抱き締めると壊れそうで……ララアのような純粋な心を持つていて……。だからこそ苦しんでたんだね……君は……」

その時アムロは彼女は愛する人に調教を受けて変態行為をする様になったと言う事を思い出した。

「すると、ハマーンをあんな性癖に調教した男っていうのは……シヤア？シヤアなのか！」

アムロはそう言い放つとしばらく画面を見つめた後にこう呟いた。

「一人遠回りをして何をしているんだ……シヤア……」

その時、アムロはハマーンから貰ったディスクの事を思い出して、パソコンで開いてみた。すると彼女が様々な場所で様々な調教を受けている画像が沢山入っていた。

「シヤア……お前……やり過ぎだろう」

顔を赤らめながらそれらを見てみると、見慣れない拡張子のファイルが存在した。色々調べてやっとそのファイルを開くと、どうやらサイコミュシステムの概念と設計に関する事だった。しかし肝心な所

は暗号になっており、容易には解析出来そうもなかった。

「これは……」

その時アムロはハマーンが別れ際に言った言葉を思い出した。

『連邦側のモビルスーツに足りないモノがね……』

「そういう事……か……」

アムロはこの暗号を解読して、新型モビルスーツのシステムに組み込みたいと思っただけだが、この資料をハマーンから直接受け取った事は当然として、一体どのような経緯の末に入手する事になったのかは、口が裂けても言えない事だった。

「さて……どうしたものか……困ったね」

とても嬉しそうな、しかし困惑した表情でディスプレイを眺めるアムロだった。その技術はやがてガンダムへと搭載される事になるが、それはまた別のお話……。

そして、全てはハマーンの思うままに……。

背徳な戯れ 完